

評価懸念が過剰な心配に及ぼす影響
—認知的統制による調整効果の検討—

町田規憲¹⁾ 清水健司²⁾ 佐藤健二³⁾

Effect of fear of negative evaluation on excessive worry: An examination of modulation effect on cognitive control.

Minori MACHIDA¹⁾, Kenji SHIMIZU²⁾ and Kenji SATO³⁾

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationships among fear of negative evaluation, excessive worry (state and trait), refraining from catastrophic thinking skill, and logical analysis skill. A survey was administrated to 211 undergraduate students on fear of negative evaluation, excessive worry (state and trait), refraining from catastrophic thinking skill, and logical analysis skill. The analysis showed that refraining from catastrophic thinking may be able to moderate the effects between fear of negative evaluation and state worry. The analysis also showed that the people who are higher fear of negative evaluation, higher refraining from catastrophic thinking skill, and lower logical analysis skill, tend to get worth their trait worry. In conclusion, when we intervene for the people who are higher fear of negative evaluation, we should explain not only the way how to use refraining from catastrophic thinking skill, but also the way how to use logical analysis skill.

Key Words: fear of negative evaluation, excessive worry, cognitive control

1) 徳島大学大学院総合科学教育部臨床心理学専攻 Master Course of Clinical Psychology, Graduate School of Integrated Arts and Science, Tokushima University

2) 広島国際大学心理学部 Department of Psychology, Faculty of Psychology, Hiroshima International University

3) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University

【問題と目的】

人は自身が評価される社会的場面やそれを控えた状況では、少なからず未来や評価について心配するものである。そうした懸念の増加は、正常な発達の一部 (Ollendick, King, & Frary, 1989) とされる一方で、他者からの否定的な評価を恐れる傾向が極端に強まると、対人不安傾向が高まるほか、社交不安症 (Social Anxiety Disorder : 以下 SAD) に陥る可能性もある。この対人不安の中核的な概念 (Leary, 1983) であり、かつ SAD の背景 (Rapee & Heimberg, 1997) にあるとされるのが、評価懸念 (Fear of Negative Evaluation) である。

評価懸念とは、「他者からの否定的な評価に対する心配や、否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配」と定義されている (Watson & Friend, 1969)。先述したように、評価懸念は対人不安や SAD の中核的認知とみなされることから、多くの研究ではこの評価懸念を低減させることに主眼が置かれてきた。しかし、評価懸念得点の高さは、周囲の様子に気を配りながら周囲にほど良く合わせることでできる適応の柔軟性を有していると考えられること (岡田・渡田, 1992)、評価懸念の高い子どもは締め切りや約束を守り、規則に従順という行動特徴を示すことが指摘されている (Kencall, Krain, & Treacwell, 1999)。つまり、評価懸念が高くとも、その懸念が主観的に制御可能であれば、それは適応的に機能し得る認知特徴であるとも考えられる。よって評価懸念について検討する上では、単にそれを低減させるのではなく、評価懸念によって生じる不適応的過程に適切に対処する方法を検討することこそが重要といえる。

評価懸念の定義に含まれている懸念や心配は、主観的に制御困難に感じられる程度まで増悪する場合に、認知資源を消耗することで問題解決の行動への従事率が低下し、回避的で問題解決に寄与しない行動が増加することが示唆されている (Wells, & Matthews, 1994 箱田・津田・丹野 2002)。つまり否定的評価を恐れて過剰な心配に巻き込まれる結果、皮肉にもパフォーマンスの低下を導き、実際に評

価の低下を導きうるということである。このように、問題解決やそのための準備にも寄与し得る心配や懸念が、制御困難なレベルまで増悪する要因として、内的もしくは外的な脅威やネガティブな情報に注意を集中することが指摘されている (Wells, et al., 1994 箱田他 2002)。問題解決場面や他者からの評価場面においては、適応的反応の表出を意図して状況モニタリングを行うのは、誰にでも普遍的にみられる適応的反応である (Wagstaff et al., 2008)。しかし評価懸念が高い者は、こうした状況のモニタリング時に、評価への懸念が高まることで否定的評価に関連する情報ばかりに偏った情報収集をしてしまうことが指摘されている (Asmundson & Stein, 1994; Heinrichs & Hofmann, 2001)。以上のことから、評価懸念が高い者にとっては、懸念が高まる状況での、心配や非機能的な情報収集に代わる対処方略の獲得が求められる。よって本研究では、評価懸念の高い者が過剰な心配の過程に陥ることを予防するための、認知的対処方略について検討する。

過剰な心配を低減する有効な認知的対処方略として、認知的統制 (Cognitive Control) が提唱されている。認知的統制とは、ストレスを感じる状況においてネガティブな思考を低減するスキルであり、状況を客観的に分析して新たな解決策を産出することで積極的に問題解決に取り組むスキルである「論理的分析」と、心配を始めとする破局的思考から距離を置き、思考の暴走を止めるスキルである「破局的思考の緩和」の2側面が仮定されている (杉浦, 2007)。このうち、前者は認知療法における認知再構成法によって獲得されるスキルであり、後者はマインドフルネスといった第3世代の認知行動療法によって獲得されるスキルであるとされている。これらはいずれも、単独で、心配を始めとする種々の臨床症状を低減し得ることが示唆されており、中でも破局的思考の緩和のようなメタ認知的スキルは、過剰な心配やその維持増悪要因である偏ったモニタリングを低減し得る (Wells, et al., 1994 箱田他 2002)

しかし、これら2つの方略を個人がどのように使い分けているかという、スキル使用の

バランスによる緩和効果の違いについて検討した研究は見当たらない。しかし論理的分析は破局的思考の緩和の向上を通して抑うつを低減し得ることが示唆されている一方、単独では抑うつに対して弱い正の主効果も示唆されている(杉浦, 2007)。加えて、この2方略については、自らの自動思考に対する代替案を捻出するのか、それとも捻出そのものから距離を置くのか、という互いの志向性に一定の差異を有することが指摘されており、その差異が、必ずしも適応的に機能しないことが示されている(清水・清水, 2015)。また、これら2方略は一方のみ用いる者もいれば一方しか使用しない者もいると考えられ、そのバランスによっては、かえって過剰な心配を増悪してしまう可能性が考えられる。よって適切な使用のバランスを検討することは、評価懸念の高い者への介入方略を洗練する上で重要な意義を持つと考えられる。

以上のことから、本研究では、評価懸念の高い人が過剰な心配に至る過程を緩和する上で、どのようなバランスで認知的統制を用いることがより適応的かを検討する。なお、過剰な心配の測定には、Meyer et al. (1990) の Penn State Worry Questionnaire (PSWQ) という過剰な心配の慢性化の度合い(心配性傾向)を測定する指標が用いられることが多い。しかしこれには頻繁に心配を経験するといった要素も含まれており、心配の過剰さそのものを端的に測定する指標とは言い難い。一方で、こうした心配の過剰さに焦点化して測定可能な指標として、Worry Process Questionnaire (WPQ) が開発されており(杉浦・丹野, 1998)、これは個人が喚起した思考が制御困難に陥っている状況を想定した指標である。よってこれら2指標を、それぞれ心配性傾向、思考の制御困難性として用いることで、状态的に評価懸念による心配が制御困難になる場面での認知的統制の機能と、認知的統制を用い続けることによる心配の慢性化予防という点での機能をそれぞれ検討できると考えられる。以上のことから、本研究では、心配の指標として、PSWQとWPQを用いて検討する。

【方法】

1. 調査協力者

A県内の4年制大学の講義の一部を利用して質問紙調査を集団形式で実施した。対象者には文書と口頭で、調査の主旨を説明した。この際、回答は強制ではないことと、回答の是非が成績等には影響しないことを文書に記載したうえで、口頭でも説明を行った。研究内容と目的について同意が得られた者に対してのみ回答を求めた。回答には15分程度を要し、調査用紙は回答終了後、その場で回収した。

その結果、211名から回答が得られた(男性90名、女性121名)。平均年齢は20.16歳($SD=1.33$ 歳)であった。

2. 使用尺度

(1) 評価懸念の程度

評価懸念の個人差の測定には、Short Fear of Negative Evaluation Scale 日本語版(SFNE: 笹川他, 2004)を使用した。他者評価を気にする程度について、1因子12項目で測定した(e.g. 自分がどんな印象を与えているのかいつも気になる)。記載した項目内容に対して、“あなたは普段、まわりの人からの評価をどのように受け止めていますか。以下の文章が自分の考えや行動にどの程度あてはまるかについて、最も近いと思うものに○をしてください”と教示し、各項目について“全くあてはまらない(1)”から“非常にあてはまる(5)”の5件法により回答を求めた。

(2) 思考の制御困難性の程度

思考の制御困難性の測定には、杉浦・丹野(1998)のWorry Process Questionnaire (WPQ)の内、思考の制御困難性の下位尺度のみを使用した。記載した項目内容に対して、“あなたは、ある課題や対人関係において不安を感じる時、どんな気持ちになりますか。最も近いと思うものに○をしてください”と教示し、“全くあてはまらない(1)”から“非常にあてはまる(5)”の5件法により回答を求めた。WPQの思考の制御困難性尺度は全9項目から構成されている(本研究では、因子分析の結果、共通性が.20未満であった1

項目を除外した計 8 項目を分析に使用した)。“そのことについて考えるのがやめられなかった”などの項目からなり、社会的問題解決場面において心配を喚起した際、その思考を破局化した制御困難なものとして感じる程度について測定した。

(3) 心配性傾向の程度

心配性傾向の測定には、Penn State Worry Questionnaire (Meyer, et al., 1990) の日本語版 (杉浦・丹野, 2000 ; 以下, PSWQ) を使用した。PSWQ は、過剰な心配の慢性化の度合いを反映した心配性傾向 (e.g. 心配する必要がないと分かっていることでも、どうしても気になってしまう) について 1 因子 16 項目で測定する (本研究では、因子分析の結果、共通性が.20 未満であった 3 項目を除外した計 13 項目を分析に使用した)。記載した項目内容に対して、“以下の項目は、普段のあなた自身にどの程度あてはまりますか。最も近いと思うものに○をしてください”と教示し、各項目について“全くあてはまらない (1)”から“非常にあてはまる (5)”の 5 件法により回答を求めた。

(4) 認知的統制の程度

認知的統制の個人差の測定には、認知的統制尺度 (杉浦・馬岡, 2002) を使用した。普段の認知的統制の使用状況について、2 因子 11 項目で測定する (本研究では、因子分析の結果、共通性が.20 未満であった 1 項目、及び因子負荷量|0.30|以上を複数因子で示した 1 項目を除外した計 9 項目を分析に使用した)。論理的分析が 4 項目 (e.g. 自分状況の捉え方、

ものの見方のくせについて考える)、破局的思考の緩和が 5 項目 (e.g. その状況を深刻に考えてしまうとき、いったん考えるのをやめられる) であり、各項目について、“全くできない (1)”から“確実にできる (4)”の 4 件法で尋ねた。

【結果】

1. 相関分析と記述統計量

本研究で分析に用いた各因子についての平均値と標準偏差、及び各因子得点間の相関係数を算出した (Table 1)。

2. 階層的重回帰分析

評価懸念が思考の制御困難性、心配性傾向に及ぼす影響において、認知的統制の各下位尺度が調整変数となり得るのかどうかを検証するため、思考の制御困難性、心配性傾向を目的変数とする階層的重回帰分析を各々行った。まず、Step 1 にて評価懸念と破局的思考の緩和と論理的分析の主効果項を回帰式に投入した。続いて Step 2 にて評価懸念と破局的思考の緩和の交互作用項、評価懸念と論理的分析の交互作用項、破局的思考の緩和と論理的分析の交互作用項を回帰式に投入した。最後に、Step 3 にて評価懸念と破局的思考の緩和と論理的分析の交互作用項を投入した。また、ここでは多重共線性を回避するため、Aiken & West (1991) の手法に従い、各独立変数の測定値を平均値からの偏差に変換し、中心化した値を用いた。

尚、多重共線性が起きているかを検討するため、分散インフレ係数 (VIF) を算出したところ、いずれの値も 2.00 未満であった。さらに、Table 5 より、独立変数間の相関はいずれ

Table 1 各下位尺度の相関係数, 平均値, 標準偏差

	1	2	3	4	5
1 評価懸念	—	-.381 **	-.170 *	.511 **	.589 **
2 破局的思考の緩和		—	.324 **	-.534 **	-.609 **
3 論理的分析			—	-.164 *	-.160 *
4 思考の制御困難性				—	.712 **
5 心配性傾向					—
平均値	36.02	11.60	11.29	25.46	38.01
標準偏差	4.96	2.64	1.88	6.55	7.68

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

も $r=.40$ 未満と弱かったことから、多重共線性の問題は回避されたと判断し、以降の分析を行った。

2-1. 思考の制御困難性への影響と調整効果

WPQ 得点を目的変数、評価懸念、破局的思考の緩和、及び論理的分析を説明変数とした階層的重回帰分析を行った (Table 2)。その結果、Step 1 の回帰モデルが有意となり ($R^2=.399$, $\Delta F(3,205)=45.327$, $p < .01$)、Step 2, 3 では決定係数の増分は有意とはならなかった (Step 2; $\Delta R^2=.007$, $\Delta F(3,202)=0.840$, $p=.47$, Step 3; $\Delta R^2=.003$, $\Delta F(1,201)=1.189$, $p=.28$) ため、Step 1 のモデルを採用した。よって、以下主効果の検討を行う。Step 1 において評価懸念の主効果 ($\beta=.360$, $p < .01$)、破局的思考の緩和の主効果 ($\beta=-.408$, $p < .01$) が認められた。このことから、評価懸念の高い人はそれだけで思考の制御困難性が有意に高まり、破局的思考の緩和スキルの高い人は、それだけで思考の制御困難性が有意に低くなることが確認された。

2-2. 心配性傾向への影響と調整効果

PSWQ 得点を目的変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 3)。その結果、Step

1 の回帰モデルが有意となり ($R^2=.526$, $\Delta F(3,205)=75.953$, $p < .01$)、Step 2 では決定係数の増分は有意とはならなかったが、Step 3 において決定係数の増分は有意傾向であった ($\Delta R^2=.009$, $\Delta F(1,201)=3.842$, $p < .10$) ため、Step 3 のモデルを採用した。Step 3 において評価懸念、破局的思考の緩和の有意な主効果がみられ、論理的分析の主効果が有意傾向であった。このことから、評価懸念の高い者はそれだけで心配性傾向が有意に高まり、破局的思考の緩和スキルの高い人は、それだけで心配性傾向が有意に低くなり、論理的分析スキルの高い人は、それだけで心配性傾向が高くなる傾向にあることが確認された。さらに、二次の交互作用が有意傾向であったことから、交互作用の詳細を検討するため、単純傾斜の有意性の検定を行った。その結果算出された回帰式を元に、評価懸念高群 (平均値+1SD)、低群 (平均値-1SD) それぞれにおいて、破局的思考の緩和及び論理的分析が、それぞれ平均値±1SD の場合の回帰直線を示したものを Figure に示した。

検定の結果、評価懸念低群において、破局的思考の緩和低群、高群ともに、論理的分析の高低による心配性傾向の有意な増減は認められなかった (低群; $t=1.19$, $n.s.$, 高群;

	Step1	Step2	Step3
SFNE	0.36 **	0.36 **	0.33 **
破局的思考の緩和	-0.41 **	-0.42 **	-0.41 **
論理的分析	0.03	0.05	0.07
SFNE × 破局的思考の緩和		-0.01	-0.01
SFNE × 論理的分析		0.07	0.08
破局的思考の緩和 × 論理的分析		0.09	0.10
SFNE × 破局的思考の緩和 × 論理的分析			0.07
ΔF	45.33	0.84	1.19
R^2	0.40 **	0.41 **	0.41 **
ΔR^2	0.40 **	0.01	0.00

Note. SFNE: Short Fear of Negative Evaluation Scale, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

	Step1	Step2	Step3
SFNE	0.42 **	0.42 **	0.38 **
破局的思考の緩和	-0.47 **	-0.47 **	-0.46 **
論理的分析	0.06	0.07	0.10 †
SFNE × 破局的思考の緩和		0.02	0.03
SFNE × 論理的分析		-0.01	0.01
破局的思考の緩和 × 論理的分析		0.05	0.07
SFNE × 破局的思考の緩和 × 論理的分析			0.11 †
ΔF	75.95	0.37	3.84
R^2	0.53 **	0.53 **	0.54 **
ΔR^2	0.53 **	0.00	0.01 †

Note. SFNE: Short Fear of Negative Evaluation Scale, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

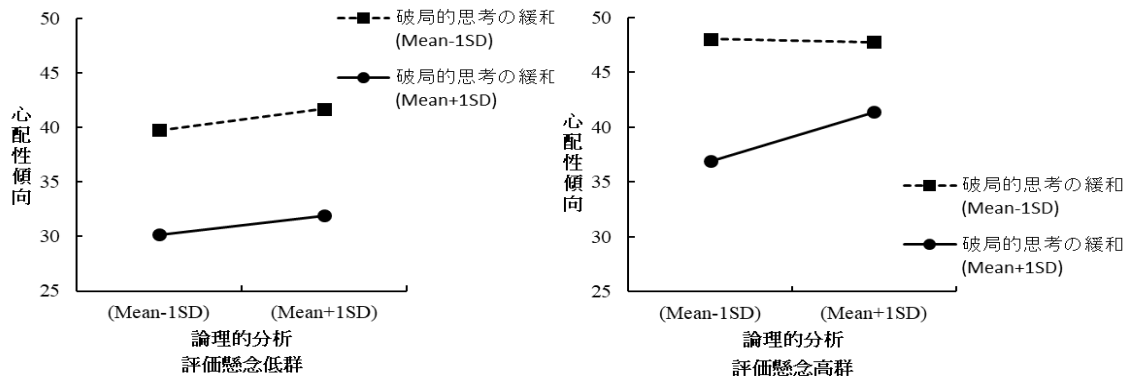


Figure. 心配性傾向への評価懸念の影響に対する認知的統制の調整効果

$t=1.12, n.s.$)。また、評価懸念高群において、破局的思考の緩和低群は論理的分析の高低によって心配性傾向は有意に増減せず ($t=0.17, n.s.$)、破局的思考の緩和と高群は、論理的分析の高低による心配性傾向の増減が有意傾向であった ($t=1.89, p<.10$)。このことから、評価懸念が高く、かつ破局的思考の緩和スキルが低い者は、論理的分析スキルの高低によって心配性傾向は変化せず、評価懸念が高く、かつ破局的思考の緩和スキルも高い者は、論理的分析の使用頻度が高いほど心配性傾向も高い傾向にあるということが示唆された。

【考察】

思考の制御困難性への影響について

WPQ 得点を目的変数とした階層的重回帰分析を行った結果、評価懸念、破局的思考の緩和の主効果のみが有意であった。このことから、評価懸念の高さは、それだけで思考の制御困難性の高さに影響し、破局的思考の緩和の高さは、それだけで思考の制御困難性の低さに影響することを示していた。以上の結果から、本研究において評価懸念が思考の制御困難性に与える影響が確認された一方で、認知的統制スキルによる調整効果は認められなかった。この結果は次のように解釈できる。

まず、評価懸念と破局的思考の緩和が心配に作用するプロセスは異なるという可能性が考えられる。これに関連して、本研究で取り上げたような、自己注目という現象が制御困難なレベルまで増悪する過程を示したモデルとして、「自己調節実行機能 (Self-Regulatory Executive Function : S-REF ; Wells et al., 1994 箱田他 2002)」が定式化されている。このモデルにおいては、先述したような、内的もしくは外的な脅威やネガティブな情報に注意を集中することを脅威モニタリングと呼称する。本研究では、評価懸念が高い人は、状況のモニタリング過程を能動的に脅威に焦点づけてしまうことで、脅威モニタリングとして機能していると考えて検討を行った。しかし S-REF モデルでは、過剰な心配を維持する脅威モニタリング (能動的な注意バイアス) の他に、情報の入力段階における受動的注意バイアスの存在も仮定している。評価懸

念は、自己注目に加えて、この受動的注意のバイアスと、脅威モニタリング機能としての脅威情報の能動的処理の両要素を内包した概念である可能性が考えられる。Wenzlaff, Wegner, Roper (1988) は、脅威情報の処理は、何度も繰り返すことで、実際に行った対処とその結果が不安の感情ネットワーク上に蓄えられ、それによって徐々にその処理が自動化されていく可能性を指摘している。このことから、評価懸念が高いほど、脅威情報の処理は自動化されており、自動的処理過程に組み込まれていると考えられる。一方、破局的思考の緩和は「否定的思考から距離を置くスキル」であることから、S-REF モデルにおいて Cognitive Attentional Syndrome (CAS) と拮抗する Detached Mindfulness (DM) の状態へ移行する際に用いるスキルとして捉えることが可能である。CAS や DM の位置づけられている S-REF ユニットの能動的処理過程であることから、破局的思考の緩和もまた、能動的処理過程であると考えられる。よって今後の研究では、評価懸念のような特性的指標の他に、注意能力を測定する指標等も用いたより詳細な検討が必要であるといえる。

心配性傾向への影響

本研究の結果から、評価懸念という注意バイアスの強い者にとっては、破局的思考の緩和スキルを獲得し、かつ思考に再注目する論理的分析は積極的に行わないことが、心配の慢性化を予防するうえで効果的である可能性が示唆された。

このことから、評価懸念の高い者への介入においては、マインドフルネスや Wells (1990) の注意訓練法 (Attention Training Technique : ATT) といった、破局的思考の緩和を向上させる介入を実施するだけでは不十分であり、そういった第3世代の認知行動療法的介入を導入する前に、複数の解決策を産出するような対処に固執せず適切に用いるための手法に関する心理教育を行うことが有効であると考えられる。例えば、自身の認知や対処行動から距離を置くことを試みる際に、その妥当性を検証しようとしたり、CAS に代表されるような役に立たない対処に固執しよ

うとする態度がいかにか非機能的であるかを、メタファーや行動実験を通して体験的に理解できるような手続きを導入することが必要になると考えられる。

本研究の限界と今後の展望

ただし、本研究の限界として、1時点での横断調査で実施していることが挙げられる。本研究では評価懸念が高まる特定の状況において認知的統制を用いるバランスが過剰な心配を緩和する過程の検討を想定していたが、各指標はいずれも特別な教示もなく独立して測定されており、場面想定法等といった場面を特定して回答を求める手続きは実施しなかった。しかし日常において認知的統制の各スキルを用いるバランスと、脅威状況においてそれらを用いるバランスとが一致するとは言いきれない。こうした要因が単純単純主効果の低さにも影響していると考えられる。よって今後の研究では、場面想定法や実験的手法を用いて、特定のエピソードにおけるこれらの因果論的關係性を検討していく必要があると言える。

【引用文献】

- Aiken, L.S., & West, S.G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Asmundson, G. J. G., & Stein, M. B. (1994). Selective processing of social threat in patients with generalized social phobia: Evaluation using a dot-probe paradigm. *Journal of Anxiety Disorders, 8*, 107-117.
- Heinrichs, N., & Hofmann, S. G. (2001). Information processing in social phobia: A critical review. *Clinical Psychology Review, 21*, 751-770
- Kenclall, P.C., Krain, A., & Treadwell, K.R.H. (1999). Generalized anxiety disorders. In R.T Ammerman, M. Hersen, & C.G. Last (Eds.), *Prescriptive treatments for children and adolescents (2nd ed.)*. Boston: Allyn & Bacon. 155-172.
- Leary, M.R. (1983). *Understanding social anxiety: Social personality and clinical perspectives*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Meyer, T.J., Miller, M.L., Metzger, R.L., & Borkovec, T.D. (1990). Development and validation of the Penn State Worry Questionnaire. *Behavior Research & Therapy, 28*, 487-495.
- 岡田 守弘・渡田 典子 (1992). 評価懸念および自己制御感から観た児童の学校不適応感の測定について 横浜国立大学教育紀要, 32, 151-187.
- Ollendick, T.H., King, N.J., & Frary, R.B. (1989). Fears in children and adolescents: Reliability and generalizability across gender, age, and nationality. *Behaviour Research and Therapy, 27*, 19-26.
- Rapee, R.M., & Heimberg, R.G. (1997). A cognitive behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy, 35*, 741-756.
- 笹川 智子・金井 嘉宏・村中 泰子・鈴木 伸一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み——項目反応理論による検討—— 行動療法研究, 30, 87-97.
- 清水 健司・清水 寿代 (2015). 完全主義者にとって有効な認知的対処とは何か 日本心理学会第 79 回大会発表論文集
- 杉浦 知子・馬岡 清人 (2002). 女子大学生における認知的統制と抑うつとの関連 健康心理学研究, 16, 31-42.
- 杉浦 知子 (2007). ストレスを低減する認知的スキルの研究 風間書房
- 杉浦 義典・丹野 義彦 (1998). 心配の合目的性と病理性——自由記述の分析と尺度の開発—— 日本心理臨床学会第 17 回大会発表論文集, 488-489.
- 杉浦 義典・丹野 義彦 (2000). 強迫症状の自己記入式質問票——日本語版 Padua Inventory の信頼性と妥当性の検討——

精神科診断学, 11, 175-189.

- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 33*, 448-457.
- Wagstaff, G.F., Wheatcroft, J., Cole, J.C., Brunas-Wagstaff, J., Blackmore, V., & Pilkington, A. (2008). Some cognitive and neuropsychological aspects of social inhibition and facilitation. *European Journal of Cognitive Psychology, 20*, 828-846.
- Wells, A., & Mathews, G. (1994). *Attention and Emotion. : A Clinical Perspective*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
(ウェルズ, A., マシューズ, G. 箱田 裕司・津田 彰・丹野 義彦 (監訳) (2002). 心理臨床の認知心理学—感情障害の認知モデル— 培風館)
- Wenzlaff, R.M., Wegner, D.M., & Roper, D.W. (1988). Depression and mental control: The resurgence of unwanted negative thoughts. *Journal of Personality and Social Psychology, 55*, 882-892.